会報 烏合の衆（第５号）
令和３年１０月発刊
日本ヤタガラス協会

日本ヤタガラス協会からのお知らせ

那智勝浦町主催による「八咫烏シンポジウム」が１１月３日に開催されます。

紀の国わかやま文化祭２０２１を機に、熊野信仰のシンボルである八咫烏を知っていただくとともに、八咫烏を通して熊野の魅力を発信するため、八咫烏をテーマにしたシンポジウムが開催されます。

○熊野信仰のシンボルである八咫烏に関する講演を行い、あわせて日本サッカーのエンブレムと熊野や八咫烏との縁についても紹介されます。

また、那智勝浦町出身で、日本サッカーの礎に貢献した中村覚之助氏の名誉町民授与セレモニーも執り行われます。

○開催日　令和３年１１月３日（水・祝）
１３：３０開会
（於：那智勝浦町体育文化会館）

○当協会会長の山本殖生氏及び当協会副会長でＮＰＯ法人サロン２００２理事長の中塚義実氏による講演が予定されていますので、この機会にぜひご参加下さい。

○申し込み先
那智勝浦町教育委員会
☎０７３５（５２）４６８６

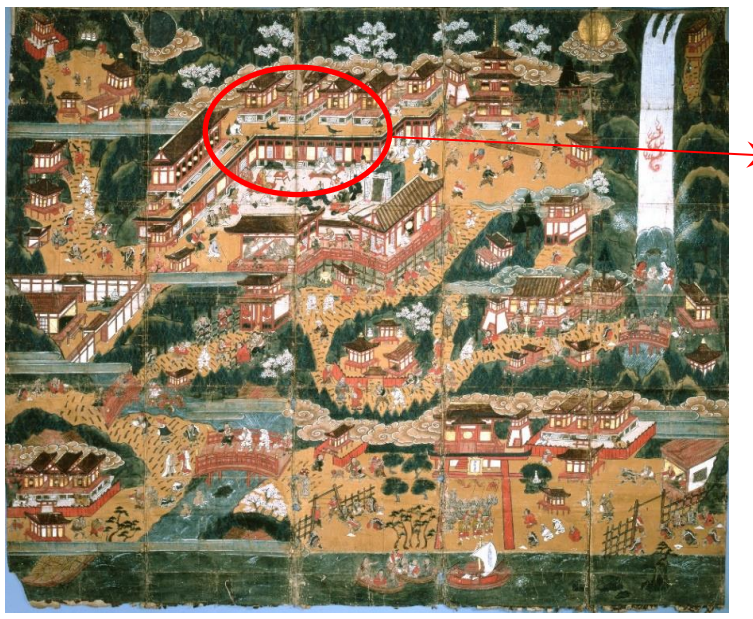
明治３７年２月６日に行われた、
日本初のサッカーの試合の記念写真
☆上段向かって右から３人目の学生服の人物が中村覚之助氏

熊野那智大社の聖域にある「烏石」

現在は、一般的には聖域にて「那智参詣曼荼羅図」でしか確認できない、八咫烏の「烏石」がある。その「烏石」とは、熊野那智大社聖域にある「神武天皇東征」において、熊野から大和の入る険路を先導した「賀茂建角身命（かもたけつのみこと）」の化身「八咫烏」（新撰姓氏録による）が、道案内の大役を終えて、熊野の地に帰り大石の上から姿を幽したと称する伝説の石がある。

熊野那智大社の烏石

しかも、「那智参詣曼荼羅図」には、若一王子社、御本社、中御前、証誠殿の前に、飛び跳ねている烏と、欄干に止まっている烏の二羽が描かれている。（ＳＩ記）



那智参詣曼荼羅図

熊野牛玉宝印と起請文

幕末の志士高杉晋作が遊郭で作ったとされる都都逸「三千世界の烏を殺してぬしと朝寝をしてみたい」

これを下敷きにしたとされる落語「三枚起請」は、明治時代に活躍した落語家初代三遊亭圓右の十八番で、吉原の遊女と三人の男を舞台にした噺である。

お客に渡した多くの起請文を反故にしても本当に心に添う人にしたいという遊女のオチで終わる落語であるが、その起請文に使われていたのが熊野三山の神烏で描かれた牛玉宝印である。

牛玉宝印は各地の社寺で発行されていたがその中でも熊野三山が発行する熊野牛玉宝印が最も神聖視されていた。

烏文字は熊野三山それぞれに数が違っていて、熊野本宮大社は８羽、熊野速玉大社は８羽、熊野那智大社が４羽、熊野本宮大社と熊野速玉大社が７羽、熊野那智大社が７羽である。

「熊野山宝印」、「那智瀧宝印」、「熊野牛玉宝印」と書かれているこの牛玉宝印を使用し誓約書の裏を起請文として使用している。

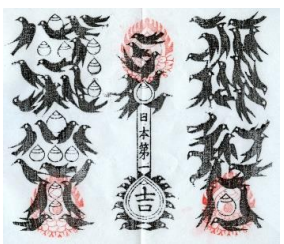
「熊野の神への誓約を破ると、神の使いである烏が三羽死ぬとも地獄に落ちるとされている。

こ　てに誓約を破った本人は血を吐いて鎌倉時代になって熊野牛玉宝印を使用した起請文が使用されるようになり、特に武将の盟約書には必ずといっていいほど熊野牛玉宝印が使用された。

源義経も兄である頼朝に自らの誠実を示すため熊野牛玉に誓約を書いている。

また、忠臣蔵として知られる元禄赤穂事件では討ち入りの際四十七人の同志が血判・起請文として熊野牛玉宝印が使用されたとのことである。

（Ｊ・Ｍ記）



熊野那智大社宝印

熊野本宮大社宝印

熊野速玉大社宝印